Back Number

本論文は

世界経済評論 2020 年 9/10 月号

(2020 年 9 月発行)

掲載の記事です

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊=7,920円 ▶ 6,600円 税込

17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典
※通巻682号以降
定期購読期間中 デジタル版バックナンバー 読み放題!!

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]
0120-223-223

お支払い方法
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店

革論新叢

「ふるまい方」の見つめ直し：総合イノベーションを探る[1)]

関東学院大学経営学部教授　大東和 武司

Covid-19から得たひとつの気づきから考えてみたい。

自然界の突然変異・進化は，ヌクレオチドと呼ばれる4種類の構成単位からなる遺伝情報の担い手・DNA（核酸）の文字上のごくわずかな変化が，20種類のアミノ酸で構成される生命活動の担い手・タンパク質に，その多様で複雑な文字を書き換える形質転換作用を及ぼすことによって引き起こされるようだ。異なる細菌間でもDNAのやりとりは行われる。抗生物質の効果が認められない新たな耐性菌の出現もその結果である。一時的な隔離もやむをえなく行いながら，感染症との関係は，これまでもそうであったように，これからも果てしなく続く。いかにバランス（落ち着き）をとっていくかである。

人類は，潜在的な冒険心なのか，本能的な征服欲なのか，「山」をめざし，見知らぬ地を探検してきた。征服欲は所有欲に，冒険心は探究心にも通ずる。ロンドン発祥のシルクハットは，高級帽子ビーバーハットの一種であり，当初はビーバーの毛皮でつくられ，乱獲でビーバーが絶滅寸前になったことでシルクが代用されて呼び方が変わった。現存の北米最古の会社ともいわれるハドソンズ・ベイ・カンパニー（1670年設立）は，ビーバーなどの毛皮貿易のためのイングランド勅許・国策会社であった。毛皮貿易は，先住民がなめし伸ばした製品を物々交換で入手することから始まった。総督ならびに冒険家の一団の会社は，かの地の行政権を含む特権を賦与された植民地支配会社として設立され，母国でファッションとしての流行を起こした。

ちなみに，毛皮との交換品であったポイント・ブランケットは，今日でも販売されているが，織り込まれている黒線の本数と長さの「ポイント」によって先住民に毛皮との交換レートを無言で示したものであった。交換の過程のなかで言葉は通じなくとも遠隔の地の人びととの接触・交流を深めた。経済活動の空間的広がりは，国家空間の拡張へとつながっていった。

天然痘は，紀元前1300-1100年頃にエジプトで確認されており，古代ギリシャ，ローマ帝国，十字軍遠征などを経て欧州各地に免疫力を高めつつ罹患が広がった。コロンブス以降は米大陸に広がり，免疫がなかった先住民人口を激減させ，結果として植民・征服活動を助けた。中国では5世紀末の南北朝時代の戦争で広がり，日本には渡来人の移動によって6世紀に大陸のエンデミック（地方性流行）が海を渡りエピデミック（流行していなかった地域への拡大）へと範囲を広げたとみられている。

天然痘の拡散のなかで，軽度の発症から免疫を得る方法について，紀元前から経験上の知見が得られていた。ただ，安全性の高い免疫獲得はジェンナーの牛痘接種（1796年）を待たなければならなかった。ただその伝播は急速で，スペインは，ラテンアメリカ，フィリピンなどの植民地に痘苗を運ぶことを1802年には立案している。

19世紀以降，上水道，下水道をはじめとする公衆衛生の概念が広がり，またワクチン開発・接種によって疑似集団感染化による予防，そして対症療法である抗ウイルス薬治療など医療体制の構築が行われてきた。個人レベルのせっけんでの手

洗いや換気の徹底など衛生観念も次第に備わってきた。江戸幕府においても，日本での三度目のコレラ流行期 1862 年（文久 2 年）にオランダ医師フロインコプスの『衛生全書』の抄訳本『疫毒預防説』によって，「清潔」「換気」「運動と食生活」など広く注意を促していた[2)]。

ところで，グローバリゼーションについて，19 世紀から 1913 年までを第 1 次グローバリゼーション，1914 年から 1970 年代を揺り戻し期，その後を第 2 次グローバリゼーションという見方がある（ジョーンズ，G：2005）[3)]。もちろん，グローバリゼーションは国際ビジネス環境を大きく変えていったが，21 世紀前後以降，国際ビジネス環境の変移要因は，経済的なものから政治的なものに移ってきた（カソン，M：2000）[4)]。揺り戻し期への移行の兆しを察知している。

多国籍企業は，グローバリゼーションのアクターのひとつだ。1980 年代後半以降リーマン・ショックまでの世界の直接投資残高は，ほぼ指数関数的な伸びを示した。放射線状に広がってきた多国籍企業活動は，その空間的広がりを網状へと，まさに地球全体を被うがごとく，その展開を深めていった。

金融規制の緩和もそれを促進させた。固定相場制崩壊以降の米国発の金融規制緩和は，1980 年代にはエピデミックのごとく英国，欧州に波及し，日本では 90 年代後半に金融ビックバンが行われたことは周知のとおりである。他方で，80 年代のラテンアメリカの債務危機（債務不履行，利払い停止宣言問題），1997 年のアジア通貨危機，2009 年のギリシャ財政赤字粉飾を端とした欧州債務危機，その間に日本ではプラザ合意後の低金利政策と内需拡大に起因する地価上昇と株価高騰（バブル），米国では 90 年代後半からの IT バブル，その崩壊後の金融緩和に起因する住宅バブル，サブプライムローン問題，2008 年リーマン・ブラザーズ破綻（リーマン・ショック）と，バブルが世界各地で生まれては崩壊し，その繰り返しのたびに，その規模を次第に大きくした。アクターは，経済の過熱にかかわるが，政治（政策）に翻弄される。

1980 年代以降，国際分業ないし企業のサプライチェーン網が多国籍企業化の進展と併せて地球規模での広がりと深まりをみせ，他方で債務危機，バブル，金融危機を繰り返してきた。われわれ人類の宿命なのか，行動経済学のいう群集心理の結果なのか，次なる成長・発展を国も企業も求め続け，そのたびに金融緩和を余儀なくされ，また次に至る悪循環に陥ってきた。

そうしたなかで，Covid-19 は，供給と需要を分断し，しかも双方に大きな影響を与えている。その対応において，多くの国は，ゼロ金利また量的緩和を行わざるをえない。すでに新興国の債務リスクは高まり，アルゼンチンは，この 5 月 22 日に支払期限の国債の利払いをしなかった。産油国や高債務国の信用リスクが高まり，資金は流出し，IMF には 100 か国以上が緊急融資を求めている。財政基盤の弱い発展途上国や最貧国の資金繰り，無理のない債務返済，そしてその国の運営への配慮は喫緊の課題となっている。国連は，「持続可能でない」債務削減のための国際組織を提案している。80 年代の債権者は主に国と銀行だったが，今日ではそれにファンドや個人も加わり，幅広く複雑になっている[5)]。

Covid-19 の猛威はすざましい。またたくまに世界中に拡がり，7 月 8 日現在で，感染者は 1,182 万人，死者は 54 万人を超えている。多くの人びとに悲しみや不安を生んでいる。今後，社会のありようは，確かに変わってしまうだろう。とりわけ，手洗いの場所さえ整っていない人びと，生計がままならない人びと，テレワークやオンライン学習などの環境が十分でない地域などなど，国内また世界のさまざまな格差は，ますます深刻になるだろう。

こうした人びとの困窮や痛みを置き去りにすれば，ひいては自らに跳ね返ってくる。いま求めら

れているのは，窮状にある人びとを守らなければならないことだ。それは確かである。そのうえで，われわれ自身の「ふるまい方」の見つめ直しも必要だろう。ウイルスとの共存・共生のためにはどうしたらいいのか。これまでの政策を見つめ直し，「無理のない」，「行き過ぎでない」政策への転換をするにはどのようにしたらいいのか。他方で，これを機だとして，国際的な M&A を展開するところも現れるだろう。こうしたことへの対応など，多面的，多重的，また多層的な見方にもとづく判断が重要になってくる。一人ひとりが目前もだが，いまは目前でないことにも想像力を働かせた，バランス（落ち着き）を持った見つめ直しである。

これは，製造現場で科学的な普遍性を追求しながら，他の「何か」にも想いをよせることにも通ずる。ライン醸造や醤油の蔵元が，そのできばえを自らの探究の結果のみでなく，その製造にたずさわったすべての人びと，また木樽や蔵付き麹菌など自然の賜物，いわば総合イノベーションがもたらしたものだという境地に行きつくことにも連なる。それぞれの場は，地域だったり，コミュニティーであったり，単なるグローバルな世界ではない。すでに，さまざまなところで，価値観や思考の軸を含め「ふるまい方」の変化の兆しが起こっているかもしれない。「距離」制約をなくす遠隔映像での対応，都心集中と周辺（地方）との関係，都市化再考，あるいは働き方，生活と仕事，社会的弱者へのふるまいなどなど。それらを拾い上げて，見つめ直すことが大切だ。甚大な試練だが Covid-19 のパンデミックが，その兆しを生かし広げる機会が与えてくれたと考えるのが素直かもしれない。

最後に，「ふるまい方」の見つめ直しにヒントを与えてくれる二人の人物をあげておこう。

ひとりは三浦梅園。1723 年生まれの江戸時代中期の哲学者だ。生涯のほとんどを大分県国東半島杵築（きつき）藩富永村で過ごし，一処で思索を深め，独創的な哲学体系の構築に全力を注いだ。反観合一，対立性（反）と関係性（比）の両方を観察しつつ対象全体を見ることが，時間（直）と空間（円）の綜合的把握，直円無窮の理解につながる。

「うたがひあやしむべきは，變（へん）にあらずして常の事也」。

突然に起こったことのみに目を向けるのではなく，日常，普通，あたり前などと思ってきたことをまずは訝しみ，懐疑し，どういうことなのかを問うことが大切だという（大東和：2017a および 2017b）[6]。

いまひとりは熊谷守一。画家である守一は，『蒼蠅』（1976）[7] で次の言葉を残している。「見えるものと同じものを描こうとは思うな。自分そっくりの自画像は，自分が世の中に二人いることになって矛盾する」。また，「たとえそれが花瓶にさした花の静物であっても，それがのっている地球の傾き加減が分るようでないと駄目だ」。

（おおとうわ　たけし）

[注]

1）本稿は，拙稿（2020）「ふるまい方：Covid-19 からのひとつの気づき」『世界経済評論 IMPACT』No. 1727（2020 年 5 月 4 日付）を大幅に加筆修正したものである。http://www.world-economic-review.jp/impact/article1727.html

2）土師野幸徳「“コロリ”対策も「手洗い」「換気」が重要だった：幕末から明治にかけてのコレラ大流行と予防法」2020 年 4 月 5 日アクセス　https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g00854/

3）Jones, Geoffrey（2005）Multinationals and Global Capitalism, Oxford University Press［安室憲一・梅野巨利（訳）（2007）『国際経営講義：多国籍企業とグローバル資本主義』有斐閣］

4）Casson, Mark（2000）Economics of International Business: A New Research Agenda, Edward Elgar Pub.［江夏健一・桑名義晴・大東和武司（監訳）（2005）『国際ビジネス・エコノミクス』文眞堂］

5）『日本経済新聞』2020 年 5 月 31 日付朝刊

6）大東和武司「いま三浦梅園に学ぶ」，世界経済評論 IMPACT，No. 932（2017.10.16）　http://www.world-economic-review.jp/impact/article932.html
大東和武司「『複雑さ』をめぐって」，世界経済評論 IMPACT，No.974（2017.12.25）　http://world-economic-review.jp/impact/article974.html

7）熊谷守一（1976）『蒼蠅』求龍堂，p. 288 および p. 339